

ナポちゃん 通信



No.11

2014年10月10日
 視界が広いから、
 視野が広いから、
 身をよせるよかよ
 2014年10月10日

自然が好き
 生きものが好き



フリスビー ジャイアント ラビット
 大きくなると10kgにもなることが
 あるらしい……④



アフリカリスとアフリカン
 2014年10月10日

目次

| | |
|-----------------|-------|
| ・マリコに挑戦 | 2 |
| ・玄武洞とコウノトリ | 3 |
| ・ミノムシの危機 | 4-5 |
| ・オオムラサキの幼虫採集 | 6-7 |
| ・ハワイの生き物あれこれ | 8-9 |
| ・みいのお仕事 | 10-11 |
| ・軟化 | 12 |
| ・新参者が語る…Part II | 13 |
| ・副産物 | 14 |
| ・なめし皮 | 15 |
| ・表紙描いて四方山話 | 16 |
| 表紙・イラスト | 原まゆみ |

マリコに挑戦

令和4年は、「動物サポーターの7年」展に続いての「大動物展」とバタバタと過ぎていきましたが、秋になりさぼちゃんの日常が帰ってきました。収蔵資料の整理やデータ登録など、学芸員さん一人ではなかなか進まない作業をサポートします。

中でもイノシシの頭骨の清掃作業では、多数のエセマリコが活躍しました。

なんじゃそれって…マリコは科捜研の女・榊マリコじゃありませんか！

イノシシの頭骨からは謎の粉やカツオブシムシの死骸(一部生きてた(+_+))も出てくるので、みんな白衣を着ての作業となったんです。

「サポーターやってなかったらイノシシの頭骨と向き合うことってないよね。」なんて話しながらの作業の途中、原さんがマリコの更なる情報を投下しました。曰く、「科捜研の女の放送で、竹を細かく砕いた竹チップと米糠を混ぜた中に死体を埋めておくと通常よりかなり早く白骨

化するって言ってたよ」、と。

骨格標本を作るには、①煮る②カツオブシムシなど虫の力を借りる③土に埋める等の方法がありますが、そんな方法があるのか、しかも早いとなると試してみたいよねと。

実は間田は竹林ボランティアで活動しており伐採した竹の処理の結果、竹チップは手に入ります。原さんは、精米機を使っていて米糠は手に入ります。

で、肝心の〇体は…となったところに、ナイスな狩人が現れました。上田さんちの三毛猫みいちゃんは、夜な夜なパトロールに出では様々な獲物をお家にお持ち帰りし上田夫妻を驚かせているのですが、この度は多分狐？が捕まえた野兎の足を横取りしてお持ち帰りをしてきたからと、博物館に持ってきてくれました。

よっしゃ、役者はそろった！実験です。竹チップとぬかを混ぜ水を加えてノウサギの足を埋めて温度計をさして観察を始めました。分解するなら熱が発生し温度が上がるはずです。…ところが2週間たっても変化がないので、水分と糠を足してみたところ、1日でグイグイ温度が上がって、容器に水蒸気がいっぱいづく状況に、さあ結果はどうなるでしょう。

榊マリコは正しかったのか、ただいま挑戦中です。(間田敬子)



玄武洞とコウノトリ

2022年9月、「ブラタモリ」を見て是非行きたかった玄武洞へ。見事な柱状節理！採石場として利用されてきたとの事。少し離れた所に青龍洞。近くに白虎洞・南朱雀洞・北朱雀洞が有る。

玄武洞は日本で最初に地磁気の逆転が発表された場所との事、「松山基範（山口大学初代学長）」が発表。また、玄武岩と言う岩石名は津和野生まれの小藤文次郎によって付けられた物だそうです。

玄武洞の有る豊岡市はコウノトリを飼育下で保護、増殖し元の生息地に返す取り組みをしています。玄武洞横を流れる丸山川近くでもたまに見られるそうです。走行中に突然窓の外で見かけて慌ててパチリ。

(本間喜美恵)



玄武洞

青龍洞

青龍洞



白虎洞

南朱雀洞

北朱雀洞



コウノトリ

玄武洞：兵庫県豊岡市赤石

ミノムシの危機

冬の昆虫さがしは難しい。成虫で越冬する種類は非常に少なく、多くの昆虫は卵や幼虫、蛹の状態ですべて冬を過ごしている。数少ない越冬する昆虫も土や枯葉、朽木などの中でじっと動かずに寒さを耐え凌いでいるためである。

そこでこの冬は比較的に見つけやすいミノムシを探してみることにした。ミノムシはミノガと呼ばれる蛾の種類の幼虫が自分で吐いた糸と葉を混ぜて巣を作りその中で木の枝にぶら下がっている。今回、採集したミノムシから幼虫を取り出してミノの代わりに毛糸や布切れでおしゃれなミノムシを作らせることを考えた。ところが簡単に見つかると思ったミノムシが見つからない。午前中かけてようやく見つけたミノムシは長さ5cmくらいのオオミノガのものの2体のみだった。

博物館に持ち帰って慎重にミノを剥がしてみたところ1体は空っぽ、もう1体の中には数ミリほどの蛹の抜け殻がたくさんと幼虫の頭の一部分が入っていた。明らかに寄生ハチかハエがミノムシの幼虫を食べたことがわかった。調べてみると数年前から外来種の寄生バエがオオミノガの数を激減させていることを知った。冬枯れの木にたくさんのミノムシが付いている光景を見るのが難しくなっているようだ。身近な昆虫も外来種による影響を受けていることを感じた1日だった。

(村上敬司)



オオミノガのミノの中からでてきた寄生ハチかハエの蛹

オオムラサキの幼虫採集

いつも採集をしている鴻の峰周辺には多くの蝶がいるが、日本の国蝶オオムラサキは見たことがない。食草のエノキはあるし、成虫の餌になる樹液がでるクヌギもある。

周南市では比較的標高の低いところにも発生しているので、このあたりにもいておかしくないと思うが、まだ見たことがない。同じタテハチョウ科のゴマダラチョウはよく見かけるので、ぜひ見てみたい。それなら確実なのは幼虫から育てることだ。そうすれば、幼虫の育つ姿や蛹もしっかり観察できる。

私は子供のころ、冬にエノキの枯葉をひっくり返して幼虫を採集した経験がある。だから割と簡単に見つかるのではないかな。近くで確実にオオムラサキがいるのは国立山口徳地青少年自然の家周辺の森である。ということで、博物館の先生・サポーターを誘って12月に採集を決行した。

当日は雪が残る激寒のなか、10名でエノキの枯葉をめくった。10分で寒さに手が凍えてきた。手をすり、足を小刻みに動かしながら、我慢してめくる、めくる。

きっと見つかる。樹の真下より、吹き溜まりの方がいるかな？こっこの樹はどうか？

だんだん不安になりながら探すこと約1時間。体は冷えきったが、10名でオオムラサキどころかゴマダラチョウも見つけられなかった。…残念。

この後、冷えきった体で忘年会に突入。『美濃吉』のシシ鍋で暖まり、イベントの多かった一年の労をねぎらった。

《後日談》

年も変わって2月中旬、サポーターの上田さんが自宅のエノキにいた。と、エノキの枝にとまっているゴマダラチョウの幼虫をもってこられた。まだまだ新芽が出るには早い、すでに樹に登っているとは思わ

なかった。

3月にもう一度幼虫探しに挑戦したいと思っている。(吉本 進)



エノキの大木の下でオオムラサキの幼虫を探す



エノキの葉を一枚一枚確認



広く探す



範囲を決めて探す

ハワイの生き物あれこれ

2023年2月末、ホノルルの街中はマスクも消毒もパーティションもなく開放感満載、まさに別世界でした。

まずは海へ、サンゴ礁の美しいハナウマ湾に行きました。貴重な生態系のみられるハナウマ湾は海洋生物保護区に指定され、開園は週5日・入場者数も制限されています。ダイビング初心者の私は湾内の水深5m辺りをどうにか潜り、いろいろな魚たちに出会えました。(写真①)

一方、ダイビングライセンスを持つ娘は別行動。ホノルル沖水深30mまで潜り、途中の礁ではウミガメに遭遇。悠々と至近距離にやってくるのでぶつかりそうになり、こちらが身をよけたとか(ウミガメを含めた保護動物との接触は法律で禁止)。ウミガメと泳ぐなんて夢のようです。(写真②③)

さて陸地では、公園やショッピングセンターの駐車場などいたるところで野生のニワトリを見かけます。中には「コケッココー」と大きな声で鳴く立派な雄鶏や、ヒヨコを連れている雌鶏も。一見ほほえましいようですが、地元の人には迷惑な存在です。元々ハワイには生息せず、移民と共に島内に入り野生化しました。捕獲も行われ、野生のニワトリにエサをあげたら罰金\$500という法案も出ているそうです。(写真④)

ダイヤモンドヘッドの麓では複数のマングースを見かけました。マングースも18世紀にサトウキビ畑のネズミ駆除のためジャマイカから導入されましたが役に立たず。それどころかハワイの固有種に危害を加え、しかも危険な病原菌を持つことから州政府による駆除が行われているそうです。(写真⑤)

旅行中、様々な生き物との出会いがあり興味は尽きません。

(藤田かおる)



写真①シマハギと
ミヤコテングハギ



写真②アオウミガメ



写真③アオウミガメ



写真④ニワトリ



写真⑤マングース



写真⑥コウカンチョウ

みいのお仕事

三毛猫みいは、一昨年5月、サポーターの間田さんを通して我が家にやって来た雌猫です。畑のネットに絡まって鳴いているところを保護されたそうです。当時は368g生後1ヶ月くらいの可愛い子猫でしたが、今では4キロ弱のたくましいハンター猫へと成長しました。主に、夕方から明け方にかけて働いています。確認できた狩りの対象は、ジネズミ、アカネズミ、カヤネズミ、ヒミズ、モグラ、ヤマアカガエル、シマヘビ、コウモリ、スズメ、アオジ、ヤマガラで、総数39体です。散歩中に木があれば登れるところまで登り、川があれば石を足場にジャンプして向こう岸に渡り、茂みがあれば身を隠してわっと襲いかかるなど、日々のトレーニングの成果でしょう。

今年最初のお仕事は私の誕生日でした。律儀なみいは夜9時半頃、カヤネズミを届けてくれました。みいにはお礼のごちそうご飯を、カヤネズミは生きていたので米をあげました。カヤネズミにはしばらく養生してもらい、おわびを言ってカヤ場へ戻しました。

次のお仕事は1月29日未明でした。ウッドデッキにある二組のサンダルに並べるように置いてあったのはノウサギの後ろ足。もう片方の後ろ足は、愛犬ごんのいるフェンスのすぐそばに置いてありました。キツネか猛禽か誰かが狩りをして食事をしたものを見つけてくわえて運んだのでしょうか。みいにとってはかなりの大きさなので2往復したと思われます。私達とごんへのプレゼント、どこから運んできたのかいまだに謎です。

※うさぎ年にちなんでもうひとつのお話※

2月12日、エノキの枝を切っている時に、うさぎ顔のかわいい幼虫に出会えました。ゴマダラチョウの幼虫です。冬の間は枯葉や枝に似た地味な色をしていますが、春になると葉と似た緑色になり、もりもり葉っぱを食べて葉に似た蛹になりチョウになるそうです。また出会える日を楽しみにしています。(上田貴子)



みい



ノウサギの後脚



ノウサギのつめ



カヤ場に戻したカヤネズミ



ゴマダラチョウの幼虫

軟化

図書館で表紙にきれいな蝶が描かれた本*が目にとまりました。タイトルの虫偏の先が蝶の触角になっているのもおもしろいなと思い借りることにしました。

※奥本大三郎(2020)「蝶の唆(おしえ)」小学館

『小さい頃から生き物が好きだった著者(ボク)が小学5年生の夏休みの事です。大学生の長兄が箱いっぱい蝶を採集して来てくれました。昆虫採集を始めてまだ一年目のボクには、柔らかい蝶の展翅より遥かに難しい軟化展翅という方法で、箱の中の宝物のような蝶に熱中』したそうです。(きっと夏休みの勉強どころではなかったでしょうね)

「軟化展翅」とは、乾いてカラカラになった蝶を湯に浸け触角などを折らないように注意しながら、さらに湯を注射して筋肉を柔らかくする。やがて頃合いを見計らって、翅を開いて展翅板にはりつけにして翅の角度などを整える と書いてありました。

ええっ!!大胆にも湯に浸けて大丈夫なんですか?鱗粉は落ちないの?あの色は?びっくりと心配が次々に。

以前、サポちゃんの一
人がヤマムガを拾って
来た時には、やはり硬く
なってはいましたが、そ
のまま翅を動かす筋肉
を針で何カ所かチクチク
して壊してからきれいに
展翅するところを見せて
もらいました。4枚の翅が
広げられない事には始ま



ヤマムガ

らない作業ですが、何度やってもバランス良く上手に出来ません。今年も何頭も「ごめんなさい」です。ちなみに表紙のチョウはクジャクチョウでした。(山田恵美子)

新参加者が語る…Part II

もうすぐ博物館ボランティアに参加して1年を迎えようとしています。1か月平均2回弱で何をしたのかと言い切れるものはありません…。しかし、今まで経験したことのない新しい活動をする事ができました。

1つ目は、皆さんが採集された昆虫の標本をきちんとケースに収納するための細かい作業でした。恐怖の作業は、昆虫を登録シールと共に針で止める作業です。力を入れる加減で昆虫の足や触覚を壊してしまい、「あっ！すみません。はずれました！」ということがあり、手が震えそうになることが度々でした。しかし、この作業を教えてくださいました皆さんにゆったりと、「大丈夫！直してあげる。」と言われ、本当にほっとしました。感謝です。

2つ目は、動物の骨を掃除することです。何ともいえない臭気に耐えながら、歯ブラシや筆、針などで骨を壊さないように細かく汚れを取っていきます。頭蓋骨や歯の骨は何となく分かるのですが、体のどのあたりの骨かを考えながらまとめる作業はとても難しかったです。



骨格の整理

3つ目は、オオムラサキの幼虫探しに徳地で野外活動をしたことです。残念ながら、見つかりませんでしたが、体がぼかぼかするくらい探すのに集中することができました。そして、その後の「美濃吉」での忘年会では、少しずつ冷えてきた身体をしっかりと温めてくれる食事を堪能しました。おいしかったですね。食事会といえば、芋煮会での鮎の塩焼きは最高でしたね。突然の干し柿作りも…。すみません、食のミーハーなので。事情があつてなかなか活動に参加できないときもありますが、来年度もまた新たなチャレンジを少しずつできたらいいなと思っています。(平川清美)

副産物

2018年にサポーター活動で開墾し、花壇にしていた博物館裏。その後コロナ禍もあり手入れが出来ず、落ち葉は積もり、草は伸び、葛の蔓もあちこちに絡まり、土はほぼ見えない状態となっていました。

そこで、2月からみんなで手入れを始めました。斜面にたまった落ち葉を掃き、絡まった蔓を引っ張ってはずし、伸びた草を刈りました。

蔓を引っ張るのはなかなか楽しい作業です。下の歩道から少し蔓を引っ張ると、上にいる人が動いた蔓を適当な場所で切ってくれます。するする一つと長い蔓が抜けると気分はすっきり、ストレス解消になりました。

何週かをかけて掃除をしたので、博物館裏はとてもきれいになりました。瓦で囲んで、花壇も作りました。たくさんとれた蔓は巻いてとめ、いつか何かを作るため(?)保管しておくことになりました。

さて、きれいになった博物館裏で、いいものを見つけました。ノビルです。私はノビルを掘るのは初めてなので、山田さんにやり方を教えてもらいました。掘って見ないとどのくらいの大きさかわからないのですが、



掘り出したノビル

茎の回りを大きめに掘っていき、白い玉がきれいにとれるとウキウキします。みんなが瓦で花壇を作っている間、私はウキウキしながら、たくさんのノビルを掘りました。

ノビルはきれいに洗って、茹でて酢味噌をつけていただきました。

(村中明子)

なめし皮

博物館のイタチ、テン、アナグマ、キツネ、タヌキなど中型哺乳類の標本の多くは、交通事故で亡くなった動物たちです。その都度回収し、冷凍保存します。動物標本を作るホネっこの会で、解凍した動物たちを解剖しています。

解剖の手順は、体重・頭胴長などいろいろと計測し、外部寄生虫などを採取し、皮むきから開始します。あお向けにし、内臓を傷つけないように皮をもち、メスで体から皮をはずしていきます。前肢・後肢や頭やしっぽの先まで切り開き、体から離して一枚の皮になるようにします。

一番手間のかかるのは、四肢の末端の部分です。爪は体に残し、指の先端部をメスで切りながら体から外して出来上がりです。毛皮の裏に塩をまんべんなくまぶし、毛皮をたたんで冷凍します。

皮なめしは手間のかかる作業であるため、標本数がある程度そろった段階で、専門の業者の方にやっていただいています。それぞれの動物種により、毛の質は変わり独特の温かみがある毛皮標本ができます。

(田中 浩)



タヌキの毛皮



毛皮の裏側



なめしが終わった毛皮

表紙 描いて四方山話

日本にいる鳥達が「家きん」とそうでない鳥に分類されるという事を初めて知りました。

今シーズン、鳥インフルエンザが日本のあちこちで発生し、悲しいニュースが飛び交っています。数年前、和歌山の動物公園でエミューに会いました。顔はこわいけど... 手の上のエサをそっとつばみまます。私はエミューが大好きになりました。その施設で鳥インフルエンザが発生したとのニュース!! エミューは「家きん」に分類されるので、いなくなっていました。

私はエミューが大好きです♡

原 まゆみ



山口博物館サポーター動物班活動報告 “サポちゃん通信” No. 11

発行 2023年3月30日

編集 山口県立山口博物館サポーター動物班

発行 山口県立山口博物館 〒753-0073 山口市春日町8-2

Tel 083-922-0294 Fax 083-922-0353

サポちゃん通信バックナンバーも閲覧可能

<https://www.yamahaku.pref.yamaguchi.lg.jp/supporter.html>

